

論 説

アルゼンチン社会の悪循環

——ビベサ・クリオージャと国の不統一（その二）——

阿 部 清 司

5 優先する習慣、空論の悪循環

アルゼンチンは中南米きっての文化大国であると言われる¹⁾。アルゼンチンは化学部門で三人のノーベル賞受賞者を出している。アルゼンチンの識字率は他のどの南米諸国よりも高い。文学図書の刊行数においてアルゼンチンはブラジルにほぼ並び、芸術娯楽図書の刊行数においてアルゼンチンはブラジルをしのいでいる²⁾。文学では優秀な人材がそろっている。芸術活動が盛んであり、国立劇場はすばらしい芸術プログラムを毎月豊富に提供している。ブエノスアイレスでは優雅なタンゴが每晚コリエンテス通りの多くの劇場で上演され、お金のある人は誰でもいつでも満喫できる。そういう上流階級の趣味は100年前と変わらない。市内の洒落たカフェで着飾った紳士淑女がコーヒーを飲みながら談笑する風景はほほえましい。昔ながら貴族趣味が生きていると言えるかもしれ

1) 井垣 昌「失業・インフレ・家計逼迫……暮らしから見える経済危機」『月刊オルタ Alternatives』2001年11月号, p. 11

2) 識字率 (2001) は、アルゼンチン97.2% (南米第一位)、チリ95.7% (第二位)、ベネズエラ93.0% (第三位)、ブラジル88.6% (第四位) である。文学図書の刊行数 (1998) はアルゼンチンで3,210冊、ブラジルで3,524冊であったが、芸術娯楽図書のそれはアルゼンチンで821冊、ブラジルで636冊であった。出典：総理府統計局『世界の統計』2007, p. 358, p. 361.

ない。

表面のみを装ってこと足りるとするのが貴族趣味であると言えよう。アルゼンチンにとって親しいのはスペインとイタリアであり、そこへのビジネス出張から帰ってきたばかりのアルゼンチン人はヨーロッパの最新事情を友人に鼻高々と語る。その情報をアルゼンチンに当てはめることはしない。すべては机上の空論，実行が伴わない空論となりやすい。

バルセロナのビジネスマンのToni Puig Picart³⁾（トニ・プイグ・ピラルト）は次のように述べる。

El problema de los argentinos es que cuando ustedes piensan una cosa, creen que ya está hecha. Buenos Aires debe dar un gran salto.

アルゼンチン人の問題は、一つのことを考慮したらもうそれが既成の事実であると信じてしまうことである。ブエノスアイレスは大変化を遂げなければならない。

話題にする，十分議論する，ことで貴族趣味のアルゼンチン人は満足してしまう。一つのことを話し合い議論し十分考えると，アルゼンチン人はもうそれで出来上がった，としてしまう。理論で装備すればそれで全て良いという先入観である。理論は高尚なもの，考えぬくことは実行したことと同じ価値を持つ，とされる。実際に行うことで手を汚すことは自分の仕事ではない。実行は部下の仕事であると割り切っている。

「すべては理論である」という題名の面白い本がある⁴⁾。社会学者のRuth Sautu（ルト・サウツウ）は

3) Carmen María Ramos, “Cuando los argentinos piensan una coas, ya creen que está hecha”, La Nación, Miércoles 31 de enero de 2007, p. 8.

4) Ruth Sautu, TODO es TEORÍA, Lumiere, 2003

“La idea central que guía este libro es que toda investigación es una construcción teórica que no se reduce a lo que normalmente se denomina teoría o marco teórico, sino que toda la argamasa que sostiene la investigación es teórica.”

この本を導く中心的な考えは、すべての調査は理論的構築である、ということである。それは、理論または理論的枠組みと普通言われるものではなく、調査を支える枠組み全てが理論的である、ということである。

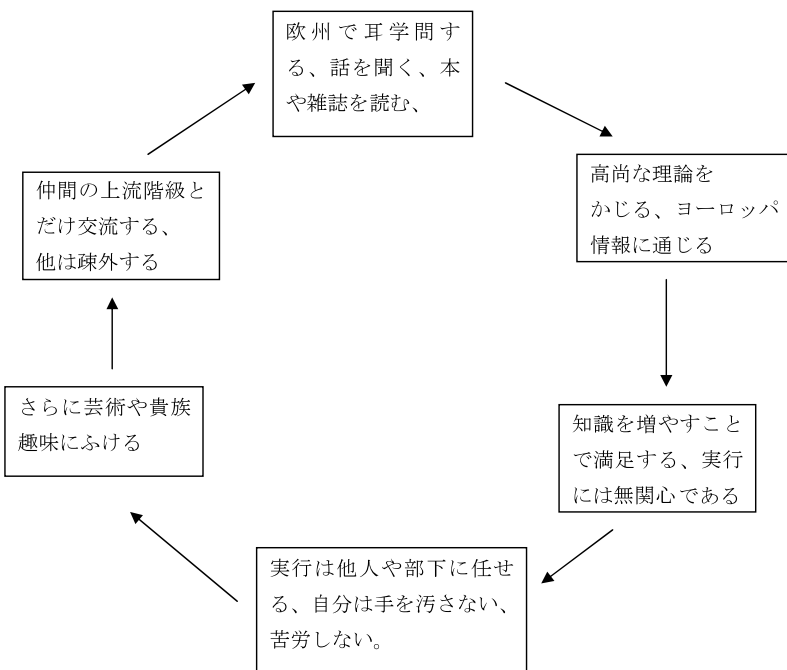
と述べる。argamasa（アルガマサ）は漆喰、モルタルという意味であるが、ここではframework（枠組み）という意味で使われている。「調査を支える枠組み全てが理論的である」とは、学問的な調査結果を支持する枠組みが、新たなデータや実証分析ではなく、やはり理論である、ということである。「支える」(sostener) という語に注目されたい。既存の理論の展望で仮説を構築し、その仮説を自分の実証データで検証し、自分自身の結論を「支える」のが、社会科学の一般的な方法と先進国ではされているが、それをしないまたはできないのが面白い。できない事情がアルゼンチンには沢山ある。私がラプラタ大学国際関係論大学院で指導した博士論文や修士論文の草稿も理論に終始していた。先進国と違って論文の中身は既存の本に書かれている理論の集まりであるが、それが博士論文や修士論文として数年後に通るのが面白い。

理論を学ぶことで終わりとする傾向は支配階級で著しい。空理空論の空回りに見える。本当により困難なのは実際に計画を実行する段階であるということを上流階層は理解しないし、理解しようともしないようにみえる。貴族の手は汚すべきでないと思っているかのようである。まるで18世紀の欧州貴族の伝統が今なお残っているかのようである。学校で

も理論がすべてということが多い。大学の工学部でも、予算不足から実験ができず、理論がすべてであるということが多い。

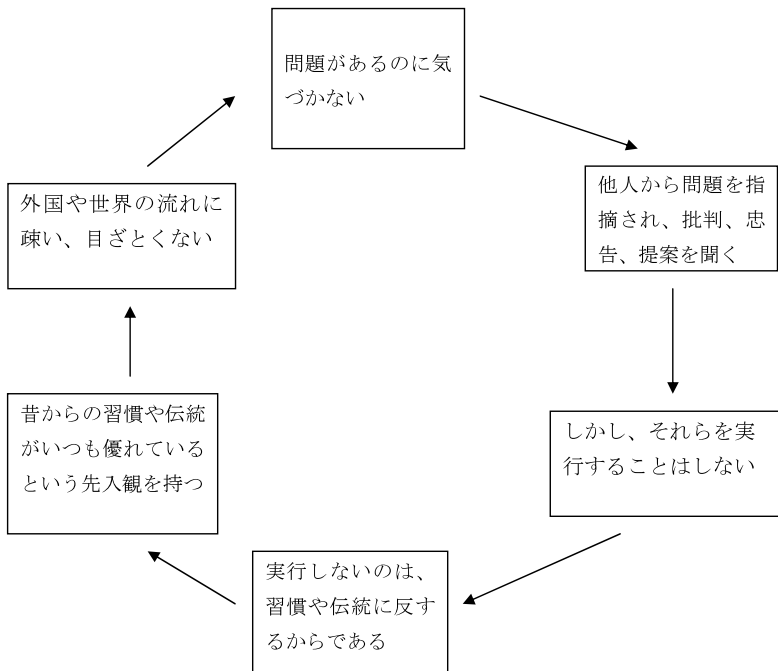
論文の目的が明確でなく、また目的追求の際の苦労も見えない。驚いたことに、自分のデータ分析や自分の実証解析や自分の野外調査の無いペーパーもある。すべては欧米の理論の寄せ集めに過ぎない。これは、アルゼンチンの数値データが少なく、しかも政府のデータの信憑性が乏しい、ことなどを反映しているかもしれない。ある程度やむをえない面もある。しかし、それでも、論文作成の指導の段階で、適切な助言を与えていれば、少しは、違っていただであらう、と思われる。空理空論の空回りの様子は第10図のように示すことができる。

第10図 貴族趣味の悪循環



このような悪循環は政府系機関の上司などに見られることがある。上流階級は上流階級ともっぱら交際し、議論することだけで満足してしまう。アルゼンチンでは習慣や伝統が重んじられる。何か新しいことをしようとするとなにかと反対される。アルゼンチンでよく聞くのはcostumbre (習慣) という言葉であり、これは外国人に分かりにくいことに言及する際にもよく用いられる。習慣にこだわりすぎると周囲の世界の流れについていけないと思うのだが、そう思うのは日本人だからかもしれない。もちろん習慣や前例にこだわる国は他にも沢山ある。日本の保守的な役所でも何か新しいことを始めようとする「前例がない」ということで断られることがある⁵⁾。

第11図 習慣優先の悪循環



途上国で活動するJICAの青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアの多くは「習慣」という大きな壁に直面して時々やる気を殺がれる⁶⁾。献身的な努力が無駄になることも多いが、大切なのは「三つのくあ」(あせらず、あきらめず、あなどらず)であるという途上国援助の基本を思い出して再びがんばる人も多い。

人々に習慣を優先する考えが根付いていることの弊害は第11図のように示すことができるであろう。井の中の蛙はアルゼンチンにもいる。

6 貧困の悪循環と南北格差

アルゼンチンの人口は約4,000万人であるが、人より牛の数のほうが多い。牛は5,100万頭もいる。アルゼンチンは牛肉の生産で世界第5位、牛肉の消費で世界第6位である。大豆生産は世界第3位、ワイン生産は世界第5位、ひまわり生産は世界第3位、レモン生産は世界第3位である。

世界の食料庫と呼ばれてきたアルゼンチンで日々の食物に事欠く人々が増えている⁷⁾。アルゼンチンでは「4人家族が生存するために最低限必要な一ヶ月当たりの食費」を「貧困ライン」というが、それは2006年6月で857ペソである。

貧困ラインに達しない人たちは、2002年には、全人口の58%もあったし、2003年にも51%であった。言い換えると、国民の半分が生きるのに最低限必要な所得を欠いていた。この比率は2004年になると42%に、2005年には36%に、それぞれ下がってきた。さらに2006年⁸⁾には27%に、

5) 私も23年間の国立大学勤務の間に事務職員からそういう断り方を幾度も聞いたことがある。

6) ガーナでもそういう経験を見聞した。阿部清司,「アフリカ経済の悲観……Afro-Pessimism……」,『千葉大学経済研究』第16号第4号,2002年3月。pp. 889-891を参照されたい。

7) 今井圭子「壁にぶつかった“アルゼンチン・モデル”」『月刊 オルタ Alternatives』2001年11月号, p. 8

2007年9月には24%に、下がったと発表されている。2001年危機直後の60%近い貧困率から見ると、かなりの好転である。さらに、最低賃金(月額)は2007年12月に980ペソ(約38,000円)に引き上げられ、貧困ライン収入(家族四人)は923ペソ(36,000円)に、極貧ラインは429ペソ(16,600円)になった、とされる。なお、アルゼンチンの一人当たりの国民所得は4,700ドルで日本の約八分の一である。

しかし、これらの公表されたマクロデータには注意が必要である。そのまま信じることは誤解を生むかもしれない。そもそもこれらの公表数字の信憑性そのものが、新聞で時々暴露されるように、問題視されている。公表された貧困率は下がってきているが、「果たしてそうか?」と街の人々は感じる。都市への人口集中が進み、街を歩いて感じるのは、ごみをあさる人々や段ボールやプラスチックなどの廃品を回収する人々が年々増えているように思える、ことである。スラムに住む極貧層は社会的に疎外され、中流階級への道を閉ざされている。そこにNGO活動は入っているが、東南アジアなどと比べると、NGOはまだまだ不足しているように見える。

学校で自ら学び資格を得る都市の住民には就職が比較的容易になるが、そうしない無学の人は除外されてしまう。グローバリゼーションは貧しい無資格者には冷たい。貧困層を無くすことを政治の長期的綱領とすることがないなら、「共同体がある」と言うのは偽りである。共同体にとって危険なのはそういう疎外者が存在する、ことである。構造的な貧困問題に対して、その場しのぎの一時的策はとられても、持続する抜本的な

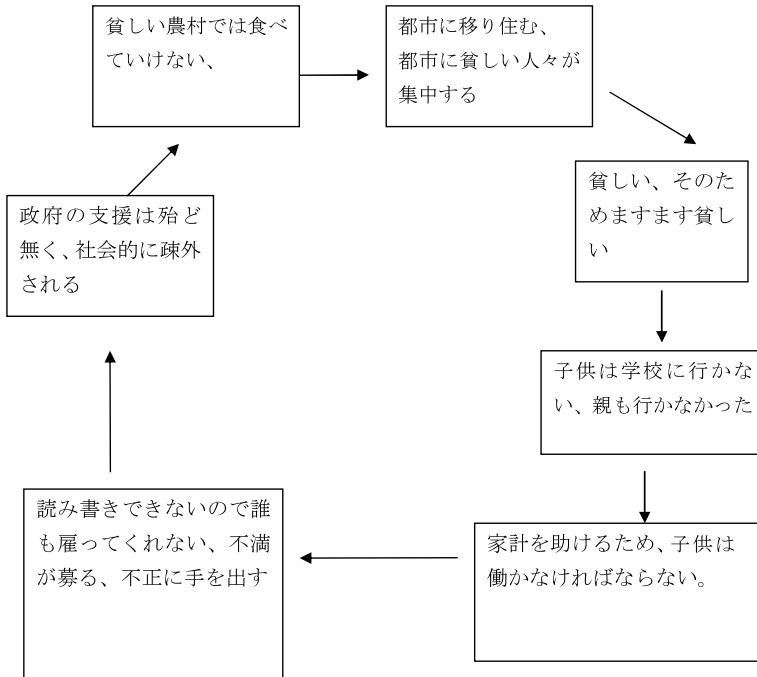
8) “Hay 500.000 pobres más de lo que dice el Indec”, La Nación, lunes 13 de agosto de 2007, p. 1

ただし、この政府統計局(Indec)の数字には最近特に新聞でたたかれてるように、政治的な操作が加えられているとのことである。これも政府不信の一例とも言える。

是正策がとられていないことは、正常な国から見ると、確かに異常である。しかし、その異常が通常のこととしてアルゼンチンでは通用している。

疎外された極貧層は絶望しているので恥じや常識や道徳を失い、どんなことにも手を出す。麻薬、売春、人身売買なども平気で行う。そういうVilla（ヴィジャ、スラム地域）は警察も訪れるのをためらい、無法地帯（zona liberada）と呼ばれている。多くのカルトネーロはビジャに住むが、彼らのバラック生活は本当に惨めである⁹⁾。見かねた地方政府

第12図 都市部周辺の貧困の悪循環



9) たとえば私のホームページ「アルゼンチンの厳しい現実」(<http://homepage2.nifty.com/kiyoshiabe/REA.htm>)を参照されたい。

(例, ラプラタ市) が共同住宅を建てて収容する場合もあるが, そういうケースはまれである。

一般に途上国の貧困の内的な原因には少なくとも8つの面がある¹⁰⁾。そして人々は「貧しいがゆえに更に貧しくなる」傾向がある。アルゼンチンの都市周辺には, 他の途上国にも共通な貧困の悪循環が第12図のように見られる。

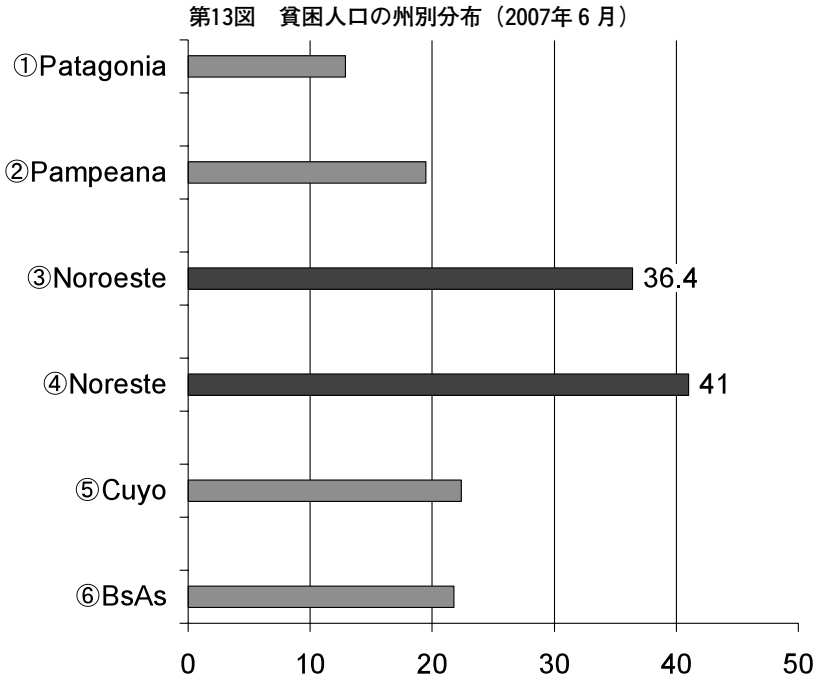
小学校に行く子供もいるが, 理由を聞くと「給食があるから」と答える。食費を浮かせるので親も許可する。しかし, 中学校になると, 給食がなくなるから, 子供は学校に行かない。学校に行く目的が昼食だけなのであるなら, 学校が荒れ, 校内暴力がはびこり, 満足な教育がなされなくても不思議ではない。

南北格差……アルゼンチンの北部の貧困

アルゼンチンの全人口3,800万人のうち約27%が貧困ライン以下の暮らしをしている (2007年)。ユニセフの調べでは, アルゼンチンの15才未満の子供のうち49.5%が貧困ラインの下にあるが, 北部諸州ではこの数値は約70%にもなる, という。世界第5位の穀物輸出国であるアルゼンチンで, 子供たちが飢えのために日々亡くなっている。

アルゼンチン全体を見渡すと, 貧しい州がアルゼンチンの北部に沢山あることに気付く。第13図は政府のINDECの数字であるが, 北東部の貧困率は41%, 北西部のそれは36.4%と全国平均 (23.4%, 2007年) を大きく上回る。南部のパタゴニアやパンパ地方のそれは全国平均を大き

10) 8つの内的要因は, 大きい財政赤字, 強い政府統制, 遅い役所の仕事, 汚職・腐敗・温故の蔓延, 不透明な政府, 政策の一貫性や長期性の欠如, 人的投資の欠如, インフラ整備の怠慢, を指す。例えば次を参照されたい。阿部清司「南北問題とグローバリゼーション」『千葉大学経済研究』第15巻第2号, 2000年9月, p. 263-264.



貧困ライン以下の
人口の割合（％）
<全国平均**23.4%**>

Fuente: INDEC

- ①Patagonia（パタゴニア地方）：Comodoro Rivadavia-Rada Tilly, Neuquén-Plottier, Río Gallegos, Ushuaia-Río Grande, Rawson-Trelew, Viedma-Carmen de Patagones.
②Pampeana（パンパ地方）：Bahía Blanca-Cerri, Concordia, Gran Córdoba, Gran La Plata, Gran Rosario, Gran Paraná, Gran Santa Fe, Mar del Plata-Batán, Río Cuarto Santa Rosa-Toay, San Nicolás-Villa Constitución
③Noroeste（北西部）：Gran Catamarca, Gran Tucumán-Tafí Viejo, Jujuy-Palpalá, La Rioja, Salta, Santiago del Estero-La Banda
④Noreste（北東部）：Corrientes, Formosa, Gran Resistencia, Posadas
⑤Cuyo（クージュ）：Gran Mendoza, Gran San Juan, San Luis-El Chorrillo
⑥BsAs（Gran Buenos Aires, ブエノスアイレス州）：Ciudad de Buenos Aires, Partidos del Gran Buenos Aires

Fuente（出典）：INDEC, Encuesta Permanente de Hogares Continua.

く下回る。南が富み、北が飢えるという南北問題が存在する。特にパタゴニア地方はエネルギー資源、観光資源に恵まれ、一人当たり所得は極めて高い。

北部のSantiago del Estero (サンチアゴ・デル・エステーロ州), Chaco (チャコ州), Formosa (フォモーサ州), Corrientes (コリエンテス州) などでは伝統的な農産物が次から次に減び、経済活動が落ち込んでいる。マテ茶、紅茶、タバコ、林業、綿花などの産業が次から次に衰退し、見るべき産業がない。そういう所では有力政治家の意図が全てを牛耳る。こんな事例がある。

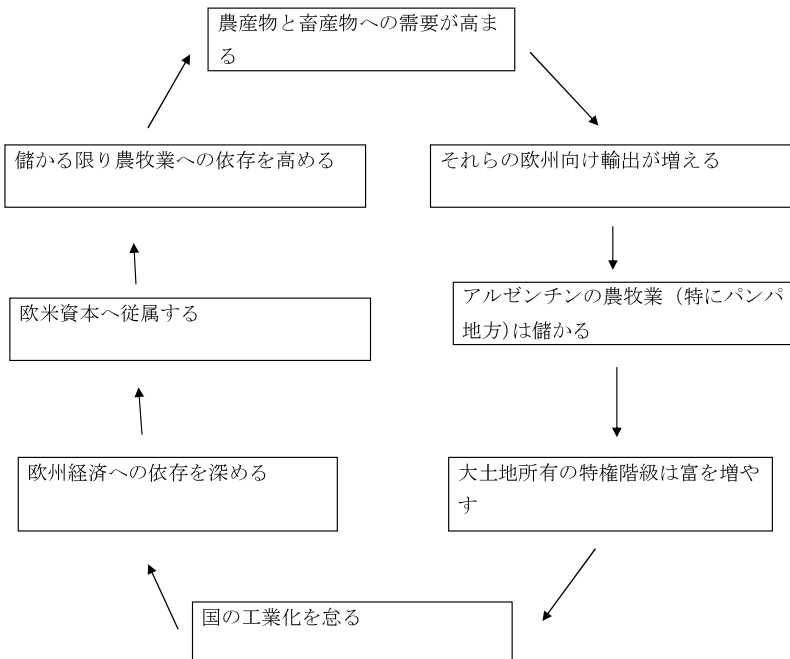
Santiago del Estero (サンチアゴ・デル・エステーロ) は, Chaco (チャコ州), Formosa (フォモーサ州), Corrientes (コリエンテス州) など共に最も貧しい地域である。一日3ドル以下で暮らす人々の州人口に占める割合は2006年下半期に44% (全国のワースト3) だった。どうしてこんなに貧しいのだろうか。サンチアゴ・デル・エステーロ州は、20年に渡ってフレアス知事のもとで独裁政治が行われてきた¹¹⁾。州警察や州裁判官を買収した独裁政治である。住民に弾圧、迫害、人権侵害が繰り返され、住民の組織結成が禁止されていた。フレアス知事は地元政治家と共に巨額の富を築いたが、他方で住民 (特に農村部の住民) は疎外されますます貧しくなった。さらに、この知事は、中央政府の干渉を認めなかった。2001年に知事の交代があって、始めてこれらの圧制の事実が明らかにされている。

11) 西田幸次, 「地方貧困地域における住民組織化」 JICA ARGENTINA, No. 55 NOTICIAS (2007年4月10日号)

この事例は、(1)個人の権力で一般住民の生活が困窮すること、(2)地方の州政府は必ずしも中央の政府の言い分に従わないこと、を示している。連邦主義と中央集権主義の戦いは独立後も長く続いてきたが、これは今も残り、国の統一を妨げている。そういう例はほかにも沢山あり、北の惨状は枚挙に暇が無い。子供が鳩を追いかける光景はよくある光景であるが、それが鳩の肉を食べるためであると聞くと、誰でも絶句してしまう。惨状は筆舌に尽くしがたく、アルゼンチンの貧困問題の根深さを知るには北西部に行くのが一番である。

北は貧しく、南は富む、という南北格差の構造がアルゼンチン国内では出来上がっている。世界的には北が富み南が貧しいが、アルゼンチン

第14図 農牧業依存の悪循環
……国際的に見た貧困の悪循環



の国内ではその逆が事実である。

世界的な見地から、アルゼンチンの輸出向け生産構造を見ると、そこには多くの問題が見える。第14図は、国際的には貧しさを生む構造を示している。国内的には一部の人々への富の集中を生む構造を示し、得をする大都市所有者たちの背後には見捨てられた住民や農民の窮状が隠されているのである。

19世紀末には欧州向け食料輸出でアルゼンチンは大いに栄え、20世紀はじめには世界で屈指の富裕国になった。20世紀前半の2度の世界大戦は必要物資の輸出国としてのアルゼンチンにブームをもたらした。こうして食糧生産国からますます抜け出せないようになってしまった。歴史的には、すでに100年前から、農牧業への依存がさらなる農牧業への依存を生じる構想が出来上がっており、そういう工業化軽視の基本的構造は今日も変わっていない。第一次産品は値動きが激しく不安定であり、工業品に対して価格（交易条件）が不利になりやすい。農業国は工業国より不利であり、貧富の格差が生じる。世界的な所得不平等の構図のなかにアルゼンチンも組み込まれている。

7 教育の荒廃と悪循環

国の発展に教育が大切であることは世界のどこでも周知であるが、その教育がアルゼンチンではうまく行っていない。小学校や中学校や高等学校が荒れている。教育機関としての役割を果たしている公立学校は減ってきている。1980年代の学校はまだ正常であり、公立高等学校も高水準の教育を与えていた。しかし、21世紀の現在は違う。学校の荒廃は2001年危機以降にさらに進んでいる。国立技術大学に入学する学生のうち80%は途中で落第してしまうという。入学試験は、チリの大学ではあるが、アルゼンチンではない。大学は無料であるが、有料にして近代化を図るという発想はまったくない。教育の荒廃は地方にいくほどひどくな

る。

社会の最も小さい単位は家庭であるが、それがまたアルゼンチンではかなり荒廃している。分裂した家庭が多く、家庭教育はないがしろにされている。家庭内暴力や校内暴力が絶えない。公立学校ではよく物が盗まれるが、盗まれた子の親は「お前も盗め」と言う。子供たちはしたい放題にされ、無規律のまま外に放り出される。訓練されていない無規律な児童が大人になって工場や会社の規律労働を好まないのも当然である。個人主義行き過ぎの悪影響は児童にも及んでいる。訓練されていない子供は好き勝手なことを行い、他人に迷惑をかけるが、親は無関心で何も注意しない。両親の共働きも悪影響を及ぼす。

しつけられていない子供は学校の教室でもうるさく、先生を悩ませる。長らく小学校の前に住んでいたある住民は次のように語っていた、「小学校の騒音に毎日なやまされた。やかましい児童の叫び声、先生の大声、言うことを聞かない子供たちの反発、先生の叱責……これらの連日について耐え切れず、引っ越した。」と。

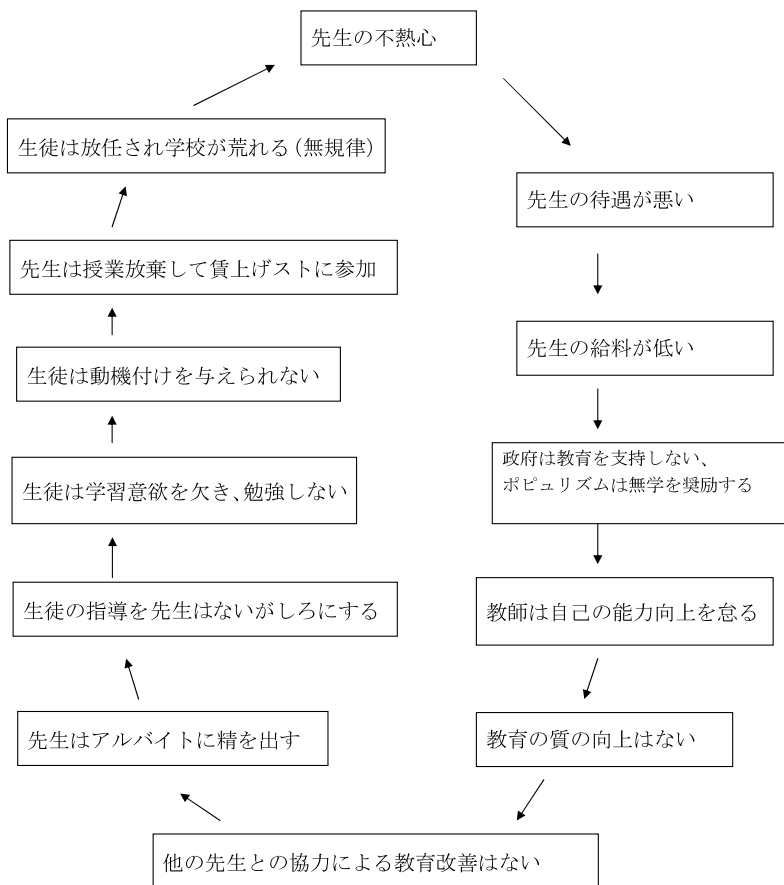
そういう荒れた学校に先生が熱意を失うのもうなづける。先生の給料は低く、待遇が悪くてやる気をなくす先生も多い。安い給料では食べていけないので先生はアルバイトで生活費を稼ぐが、政府は無関心である。アルゼンチン政府は貧しい州へ補助金を交付している¹²⁾。これらの予算は、本来ならば教育の質の向上のために使われるべきものであるが、実際は先生の給与の不足を満たすために使われている。

公立学校の先生をめぐる悪循環は第15図のように表すことができよう。これも第2図ポピュリズムの悪循環を反映している。

教育の質の悪化は本当に深刻な問題である。特に中学校の悪化は重大

12) 西田幸次「所得格差と貧困問題」亜国政経概況（第21回日亜経済合同委員会資料、2006年9月）、p. 68

第15図 公立学校の先生をめぐる悪循環



である。生徒たちは成績が悪いことを恥ずかしく思わないし、勉強しないので彼らが知っていることはつまらないことばかりである。先生たちは熱意を欠き社会的な評価を受けていない。そもそもよい訓練を受けていない先生も多い。ラ・ナシオン¹³⁾の第一面に

13) La Nacion, jueves de 1 de noviembre de 2007, pagina 1

Padres y autoridades admiten que hay un gran deficit en la formación de docentes.

両親や当局は訓練されていない教師が非常に多いということを認めている。

という記事が載っている。自分が教えることをよく理解していない教師もいるし、道德教育の時間で教室で自ら教えたことに反する行為を平気で街路で行う教師もいる(例、交通信号の無視、シートベルトの無着用)。良い学校教育を受けない児童が大人になるが、そういう市民は、公衆道德を意識せず、良心や自主性を失い、自尊心の無い単なる群衆と化する。それは、政治的に操作しやすい大衆であり、まさにポピュリズムの政治家の望むところである。良い教育に政治は冷たい。国民が賢くなって民主主義の普及と進展を要求することは歓迎されないからである。

「公民教育」(Educación Cívica)について、ある教員は「道德教育といっても本をさっと読むだけです。適用や実行は全く行わない」と述べていた。別の教員も「すべては頭につめこむだけ。理論の実際の適用など論外である」と言う。さらに別の教員は「憲法に国民の義務と権利がこのように書いてあります、と言うだけです。それらの実際の意味を教え、改革の方向を示唆することも励ますこともない」と説明している。理論と実際は見事に使い分けられている。

景気が良くなって収入があると、人々は満足し、公民教育の不足と妥協する。第1章で学んだように、公衆道德への関心は薄れてしまう。

「町をきれいにしましょう」という市役所の呼びかけを上からの命令として先生が生徒に教室で伝えても、その先生が今度は町にでると、平気でごみを道に捨てて。そういう行為は昔からの習性であり、急に変えるのは難しい。無意識にそうしてしまうからである。先生は生徒の手本

ではない。尊敬されていない先生も多い。手本喪失の生徒への悪影響ほど恐ろしいことはない。

家庭でもしかりであり、親自身が子供の手本になっていない。逆に親が子供に悪いことを教えることもある。せっかく学校で学んだ良いことを、街に出ればすぐ捨ててしまう子供もいる。それを見ても親は何も注意しない。残念ながら親も先生も手本ではない。賄賂に染まる議員も手本ではない。警察も頼りにならない。こうして自分勝手な個人主義（利己主義）が自由にはびこる。親が子供に「ごみを捨てないこと」と注意することはいとも簡単なことではないか、と思うのは日本人だからかもしれない。アルゼンチンではこれほど難しいことはない。日本の道路と比べて、一般に南米の道路は（日本に住む南米からの移民の認めるように）ともかく汚い。

教育の荒廃について2007年8月4日付けのラ・ナシオン紙に哲学者の José Luis Galimidi（ホセ・ルイス・ガリミディ¹⁴⁾）は

Otro problema serio es la educación. Se convive con el deterioro profundo de la escuela secundaria. Los alumnos no demuestran el menor pudor por sus lagunas académicas o por su pobre bagaje cultural. El conocimiento carece de significación ante sus ojos. Por otra parte, los maestros no tienen reconocimiento social. Sin educación, el pueblo se desconstituye, pierde soberanía y se vuelve mera multitud anómica y dominada.

別の重大な問題は教育である。中学校教育の悪化は深刻である。生徒は学業成績の低下や知識の蓄えの不足を全く恥じていない。知

14) La Nacion, Sábado 4 de agosto de 2007 “Vivimos divididos, sin confianza en el otro y digregados” El filósofo José Luis Galimidi analiza el daño civil que causa el individualismo“

ることの大切さを分かっていない。他方、教師は社会的な承認を得ていない。教育がなければ、人々は廃れ、主権を失い、無防備で操作しやすい大衆と化すのである。

と述べる。

さらに 全国の高등학교の校内暴力についての調査¹⁵⁾によると、

“El 52% de los alumnos sufre o ejerce violencia”

生徒たちの52%が学校で暴力を受けるか行使する。

となっている。なんと高校生の半分以上が校内暴力に関係しているのである。信じがたいことであるが、事実である。この数字を見ただけでも、いかに教育現場が荒れているかが明らかである。暴力は生徒と生徒の間のみならず、生徒から先生へ、さらには先生から生徒へ、行使される。そんな環境では落ち着いた良い教育がなされるはずがない。先生は教育に情熱を注ぐ意欲を持たない。それでも献身的な教師が私立の名門校にはいるが、ごく少数にとどまっている。

教育に投資することは非生産的であるのか

法学者のFelixV. Lonigro¹⁶⁾（フェリックス・V・ロニングロ）は

Es sabido que invertir en educación es políticamente improductivo.

教育に投資することは政治的に非生産的である、ことはよく知ら

15) La Nación, Sábado 28 de julio de 2007, página 24

16) FelixV. Lonigro, “La importancia de la Constitución”, LA GACETA DE ECONÓMICAS, Año 4 N°31, domingo 27 de abril de 2003

れている。

と述べる。Populismo (第2図)のもとでは「教育に投資することは非生産的である」とされている。この意味が最初私には分からなかったが、アルゼンチンの内情を知るにつれ、1年後に少しずつわかるようになってきた。日本やアジアの多くの国では教育への投資は常に重要視される。しかし、アルゼンチンのような南米ではそうではない。Populismoo (人民主義の政治) は人々の無知を前提にしているのである。

義務教育の公立学校は内部の施設も荒れている。校舎は落書きで一杯である。落書きは外壁にも見えるが、校内のほうが、よりひどい。冬には暖房がないので休校になる学校もある。確かに授業料は無料であるが、それが教育の質を低くしている。アルゼンチンは競争社会ではない。有料にして教育の質を高めるという発想は当局の念頭にはない。

将来を担う若者についてショッキングな調査がある。ニニ世代 (Generación Ni-Ni) についてある記事は次のように述べる。

Generación Ni-Ni

Son jóvenes de entre 14 y 24 años que “ni” estudian “ni” trabajan. En la Argentina, representan el 20% de dicha generación.

Los jóvenes tienen plazos cortos. Eligen su carrera no por su excelencia sino por cuál será más corta y garantice, en teoría, ganar más plata en menos tiempo.

ニニ世代とは勉強することも働くこともしない14から24歳までの若者を指す。そういう無気力な若者はアルゼンチンでは14—24歳人口の20%を占める。

若者の視点は短期である。職業を選ぶ基準は、そのすばらしさではなく、労働時間が短くより短い時間により多くの儲けを理論的に

保障しているかどうか、である。

何もする気がしない無気力が若者はつい麻薬に手を出してしまう。2006年（2007年）に高校生の15%（19%）がマリファナを吸ったと答えた。45%の大学生が2007年に「マリファナを吸うのはごく簡単である」と答えた¹⁷⁾。麻薬に犯される若者が、大学生を含めて、増えている。もちろん、学校に行かず働きもしない無気力な若者ニート（NEET）¹⁸⁾は日本にもおり、将来の不安要因として懸念されている。

アルゼンチンの将来は短期的な見方しか持たない若者たちに託されている。そうでない優秀な若者も少数いるが、そういう彼らも個人主義や利己主義から解放されているわけではない。とくに優秀な学生はヨーロッパの大学に入り、そこで就職し、帰国しない。しかし、そういう頭脳流出がアルゼンチンで問題視されることはほとんどない。

千葉大学の一人の学生は、アルゼンチンにおける研修旅行（study tour¹⁹⁾）を締めくくる反省会で、「アルゼンチン社会は今のままではいつまでもたっても何も変わらないのではないか」と感想を述べていた。たった一週間の研修であったが、それに気づいたのはすばらしい洞察であり大変良いことである。

17) Crece el consume de drogas entre los estudiantes bonaerenses, La Nacion, 7 de octubre de 2007.

18) ニート（NEET）とは英国政府が労働政策上の人口の分類として定義した言葉で「Not in Education, Employment or Training」の略語であり、訳せば「教育を受けず、労働をおこなわず、職業訓練もしていない人」となる。欧米では「ニート」という用語は「日本における若年無業者問題を指す語」として知られ、現在では「意欲が無い」という意味で使われることが多くなっている。なお私のゼミの卒業生の一人も無気力なニートになってしまったことがある。ふとしたことがきっかけで、仕事の意欲がわき、今では定職についている。

19) 2007年9月12—19日、JICA、JETRO、JBIC、Toyota、ISSUE、DIMARE、大使館などで研修。アルゼンチン研修旅行には千葉大学の学生9名、教員2名が参加。

周囲の国々からアルゼンチンに多くの人々が働きに来ている。アルゼンチン人は規律労働 (Trabajo Disciplinado) を嫌うが、働きに来る外国人は違う。ボリビア人はもくもくと一生懸命によく働く。パラグアイ人もきわめて従順に勤勉によく働く。ペルー人も本当に真面目によく働く。そういう外国人労働が実はアルゼンチン経済を下から支えている。お高くとどまるアルゼンチン人は手を汚すことをためらい、近隣の外国人に寛大にも職場を与えているのである。

最近東京で国際的な見本市が開かれた。チリのブースは特産のワインの売り込みに皆熱心であった。ペルーやボリビアやパラグアイでも自分のブースに一人でも多くの客を呼び込もうと熱心であった。しかし、アルゼンチン・ブースの人は美味しいメンドーサ・ワインをゆったりと楽しんでいた、という。アルゼンチンは昔は先進国の一員であったが、そういう伝統と誇りを自慢する上流階級は勧誘や接客にあくせくと働くことはしない。勤労意欲において周辺国とのコントラストはかくも明白である。世界的情勢は変化が著しいが、果たしてアルゼンチン人は十分目覚めているのだろうか。今はグローバリゼーションの時代であり、その影響はひしひしとアルゼンチンの内部にも入り込んでいるのである。

8 三権の未分立と人治主義

先進国では三権分立は当たり前のことであり、問題になることはまれである。しかし、中進国のアルゼンチンは違う。前述のことから推察できるように、その実際は歪んでいる。

三権分立の現状

政府権力に制限を課すのはより高い規律 (至上の規律, norma supreme) である。正常な三権分立制度のもとでは、行政府 (ejecutiva) の権力行使の行き過ぎを立法府 (legislativa) や司法部 (judicial) が制

限する。その根拠になるのが憲法である。

アルゼンチン憲法は1853年に制定され、改定が1860, 1866, 1898, 1957, 1994年になされてきた。今日、制定から150年たったが、憲法の大切さの理解は未だに普及していない。国民の多くは憲法に無関心であり、その基本的な条項をすら知らない。学校でそれらが効果的に教えられることはない。

法治国家においては行政府がその権力行使の限界を知らない、ということは「あり得ない」が、アルゼンチンではその「あり得ない」ことが普通に起きている。現実のアルゼンチンは法治国家でも民主国家でもない。権力を持つ人の支配する国であり、法治主義ではなく、人治主義がはびこる。法学者のFelix V. Lonigro（フェリックス・V・ロニグロ）は次のように述べる。

A 150 años de la creación de la Constitución Nacional, no parece existir conciencia en nuestro país acerca de la importancia que tiene una norma de tal magnitud, y es probable que muy pocos ciudadanos puedan responder correctamente si se les consulta cuáles son los objetivos fundamentales y principales contenidos de aquella.

¿Sabe un ciudadano que sus derechos y libertades más importantes están contempladas en la Constitución Nacional ?

¿Sabe un gobernante que una Constitución sirve para limitar el poder que ha recibido del pueblo y que desconocerla implica ignorar el marco jurídico dentro del cual debe ejercer el poder y conducir los destinos de la Nación ?

憲法が造られてから150年経つが、それほど大きなスケールの規範（憲法）が持つ重要性が我々の国では意識されていないように見

える。もし憲法の基本的な目的と主要な内容は何かと問われたなら、それに正確に答えられる市民は恐らく殆どいないであろう。

市民は、非常に重要な権利や自由が憲法に記述されていることを、知っているだろうか。

政府は、国民から託された権力の行使に憲法が一定の制限を課していることを、知っているだろうか。司法制度のなかで政府は権力を行使し国民の将来を導かなければならない。それを知らないということは司法制度を無視することを意味することを知っているだろうか。

これらの問いに「知らない (No)」という否定の返事が返ってくるようなら、事態は深刻であり、その被害を社会は被ることになる。「知っている (Yes)」という肯定の返事が来るようにするには、公民としての自覚の向上（憲法の知識を定着させる政治教育）が求められる。言い換えると、憲法にある共和制と民主主義の価値をより多くの国民が正しく理解し実際に適用することが必要である。これは、統治する側にも、統治される側にも、求められることである。

アルゼンチンの退廃の原因は二つある。

第一は行政府の側の公民意識の欠如（権力はすべて憲法に沿って行使しなければならないという意識の排除）、

第二は一般市民の側の公民意識の欠如（憲法にそって国民としての義務と権利を果たすことが無いこと）、である。

民主主義と共和制の本質的な価値は、正直であること、団結していること、透明であること、尊重すること、そして、寛容であること、に

る。これらを市民や司法府・立法府・行政府が正しく理解しその通りに適用することにより、アルゼンチンはより良い社会の基礎を築くことができる。そのための政治教育は、実際には非常に困難な課題であるが、企てなければならぬ。教育に投資することは政治的には非生産的である、とアルゼンチン政府はずっと考えてきた。学校における公民教育は現実には無きに等しい。しかし、誰かが一緒に蛮勇を奮って試みなければならぬ。そうしない限りアルゼンチンの国家としての再建は望めないであろう。司法の改善は競争的な社会的経済的システム拡大の鍵をにぎる。

支持されない法律

法律や規範は権力者の意思の反映である。権力者が全体の奉仕者でない場合、国民がそれに従うのは難しい。正当な権威によって支持されない法律や規範は専横や権力乱用を導く。国民に支持されない法律や規範が守られることはない。それは一部の者の利益になるだけである。アルゼンチンでは法律を制定しても、その施行細目や罰則規定は、利害対立のため、ほとんど存在しない。いいかえると、法律はそもそも効果的な実行を前提にしていないのである。為政者の対応は場当たりのであり、法治国家としての機能は決定的に欠如している。

法律よりも権力がモノを言う社会

ジェトロの稲葉公彦氏²⁰⁾は

「アルゼンチンは法律よりも力関係や人間関係がモノを言う社会であり、牛肉の輸出を禁止した政府は、レギュレーターではなく、権力そのものだ。ルールは自分で決めるものだからこそ、ルールを

20) 稲葉公彦「経済随筆 法的安定性の欠如をもとめないアルゼンチン」, 在
亜日本商工会議所会報 第39号 (2007年1月号)

自分で決めることができる人がアルゼンチンでは勝者になる。最後にリーズナブルな落としどころに落ち着くことを期待してはいけないのだ。」

と述べている。

法的安定性は、欠落しているというより、排除されている。アルゼンチンにあるのは力関係や人治主義である。曖昧なままで事を進めて最後に清算しようとする、色んなトラブルに巻き込まれる。他国との関係でみると、アルゼンチンはグローバリゼーションに背を向け、自分のルールをこれまで押し通してきた。昔の習慣がすべての新しき企てに先行している。

それでも経済成長が近年のキルチネル政権下で高く維持されているのは、実は、アルゼンチンの底力のためである。他の多くの途上国と違ってアルゼンチンは天然資源、エネルギー、食糧生産、高い人的能力に極めて恵まれている。アルゼンチンの企業では一人一人の能力は高く、やる気を起こさせて任せると有能な一個人は高品質のものを作る²¹⁾。これは周辺国ではほとんどないことである。国内消費を支えているのは盛んな商業活動である。店の売り上げを伸ばすための特別の日（セールス・キャンペーンの日）がアルゼンチンには沢山²²⁾あり、筆者が数えてみたら1年間で20以上あることが分かった。

そういう土着の力が不利な材料を跳ね除けて経済成長を維持している。三権分立はないので、三権を掌握している有力者が国政を動かす。裁判

21) ただし、組織として互いに協力して働くということはない。この協力の欠如が大きな問題である。

22) 友達の日、動物の日、女性の日、母の日、父の日、子供の日、祖父母の日、先生の日、学生の日、医者の日、弁護士の日、体育の日、秘書の日、建築家の日、勤労者の日、婚約者の日、環境の日、伝統の日、甘いものの日、人種の日、国旗の日、マルビーナス（フォークランド）の日などである。これだけで22になる。

官の任命は為政者によってなされ、国民がその任命に関与する余地はない。政治家が関与する犯罪事件において政治家が有罪判決を受けることはまれである。警察官が罪を犯しても無罪になる国である。裁判の公平性や倫理性が崩れ、事件の解決も金次第となる。権力者の恣意がすべてに優先する。そういう関係は第16図のようにまとめられよう。

政治学者のNatalio Botana²³⁾ (ナタリオ・ボタナ) は次のように述べる。

Hay una doble defección de los controles institucionales: el Poder Ejecutivo tiende a independizarse de la vigilancia del Legislativo y del Judicial y, a su vez, la supremacía ocasional de un gobierno se libera de los controles internos de la administración del Estado.

制度的コントロールからの離脱が2重に起きている。行政府はまず立法府の監視から独立し、次に司法部の監視から独立する、傾向がある。行政府の権力の優位性は国家運営上の内部コントロールから解放される。

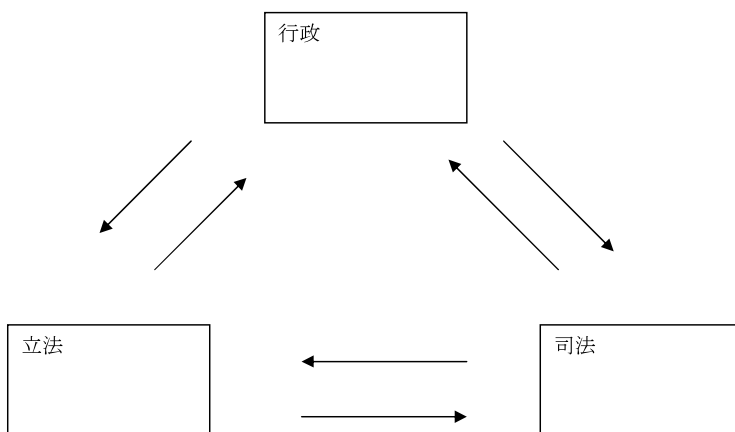
アルゼンチンで目に付くのは、三権分立ではなく、行政権の絶対的優位（だんとつ）である。巨大な権力を持つ行政府が国のすべてを牛耳っている。司法の独立性を損ない、立法府に介入し、公正であるべき統計数字を意図的に操作している。腐敗や汚職や賄賂は日常的になされ、組織の効率を低くし、透明性の欠如を引き起こしている。それらの多くは国民に見えない。すべて暗闇の中で行われる。時にはスキャンダルとして新聞にのることもあるが、ごくまれである。

23) Natalio Botana, El juego de la corrupción, La Nación, 16 de agosto de 2007, p. 25.

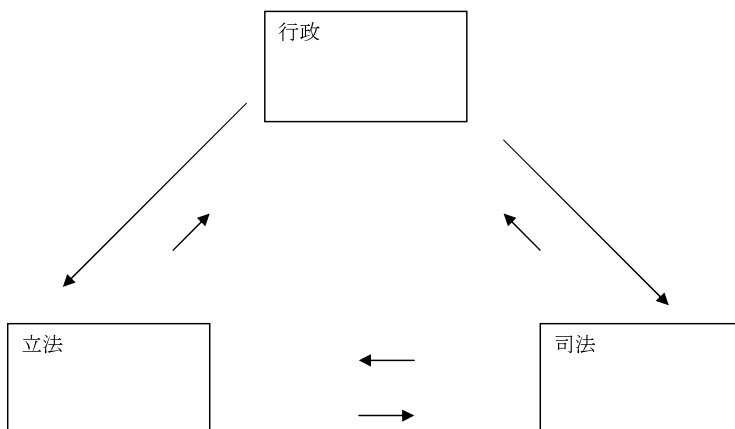
第16図 三権の分立と未分立

矢印の大きさは影響力の大きさを示す (ベクトル)

三権分立 (理想)



三権の未分立 (アルゼンチン)



アフリカのサハラ以南の国々（例、ブルキナ・ファソ）では汚職が蔓延し、ネポティズム（nepotismo、縁故びいき）がはびこっている。国家は特定の利害関係者の集まりに過ぎず、権力者の恣意がすべてに先行する国がアフリカには多い²⁴⁾。そういう状況にアルゼンチンが似ている、と言ったから言いすぎであろうか。

El pueblo no gobierna sino a través de sus representantes.（国民はその代表を通してでなければ統治することはない）とアルゼンチン憲法にはある。国民は代議員を通して国政に参加する。これが民主政治の基本である。しかし、アルゼンチンの現状はこの理想とは縁遠い。権力行使の行き過ぎを制御する条項に人々の注目が集まることはまれである。注目しても何も始まらないことを周知しているからである。

9 憲法に帰れ……悪循環から抜け出す方法

これまで見てきたように中進国アルゼンチンの内部では、地球の裏側の国（日本）の住民にとって未知のことであるが、多くの問題が山積し絡み合っている。アルゼンチンの有識者によると、どんな解決策が考えられるであろうか。

私のラプラタ大学国際関係論大学院クラスは社会人向けであり、昼間に院生はオフィスで働いている。授業料を払って来るだけあって皆優秀であり、英語もでき知識も豊富である。ふとアルゼンチン社会の停滞の原因はどこにあるのか、と訊いたことがある。彼らは一様に「悪いのは政治家である」と答えた。

アルゼンチンでは公民意識の欠如が著しいが、その責任は誰にあるのだろうか。確かに第一に政治にある。それでは市民の側には全く責任が

24) 詳しくは、阿部清司「アフリカ経済の悲観……Afro-Pessimism……」『千葉大学経済研究』第16巻第4号、2002年3月、p. 896を参照されたい。

ないだろうか。法学者のFelixV. Lonigroによると治める側（政治家）にも治められる側（一般の国民）にも問題があり、問題の責任を政治家だけに押し付けることはできない、とされる。

法学者のフェリックス・ロニグロ（FelixV. Lonigro²⁵⁾）は次のように述べる。

La decadencia argentina no tiene su único origen en las malas políticas o en la eterna corrupción, sino también en la falta de conciencia cívica de los gobernantes - a quienes poco ha importado avasallar impunemente la ley máxima de nuestro país - y de los gobernados - quienes nunca nos preocupamos demasiado por ello.

アルゼンチンの衰退の原因は悪い政治や果てしない汚職だけにあるのではない。統治する側の公民意識の欠如と統治される側の公民意識の欠如にもある。統治する側（政府）にとって我々の国で最上の法律（憲法）に従うことは大して重要なことではないし、そのことで罰せられることもなかった。統治される側（国民）にとっては憲法なんてまったく重要ではない。

政治家の肩を持つわけではないが、確かに国民の側にも問題がありそうである。フェリックス・V・ロニグロ²⁶⁾は核心をつく大切な提案を次のように行う。

Los establecimientos educativos públicos y privados, en todos

25) FelixV. Lonigro, "La importancia de la Constitución", LA GACETA DE ECONÓMICAS, Año 4 N°31, domingo 27 de abril de 2003

26) FelixV. Lonigro, "La importancia de la Constitución", LA GACETA DE ECONÓMICAS, Año 4 N°31, domingo 27 de abril de 2003

sus niveles, deben generar conciencia cívica y constitucional, profundizando la lectura de la Constitución Nacional y divulgando aquella pautas éticas de conducta en las que deben convivir los ciudadanos y con las que deben gobernar nuestros representantes.

Si la ciudadanía adquiriera esa cultura del respeto a la Constitución Nacional, y a todo el ordenamiento jurídico en general, e incorporara a la conciencia diaria los valores esenciales de la democracia y la república (honestad, solidaridad, transparencia, respeto, y tolerancia), se estaría generando una base para que los futuros gobernantes trasladen esas pautas de conducta y esa conciencia cívica a las próximas gestiones de gobierno.

公立および私立の教育機関はすべての学年で公民意識と憲法意識を育てなければならない。憲法の学習を深め、市民が一緒に生きるために必要なそして市民の代表者（代議員）が統治するのに必要な行動倫理規範を普及させなければならない。

憲法とすべての法令一般を尊重する文化を市民が得るならば、そして、日々の意識に民主主義と共和国の重要な価値（正直、団結、透明性、尊敬、寛容）を組み込むならば、将来の政府が行動規範と公民意識を次の政府に移すための土台を形成することになるであろう。

国の内部に住む人間からの厳しい提案ではあるが、正論である。長期的に見てこれ以外にアルゼンチンを救う道はあるであろうか。いかに難しくても挑戦しなければならない。習慣や伝統は確かに大切であるが、アルゼンチンは、もっと外の世界に目を向け、皆で一緒にKaizen運動に取り組まなければならない。政治家も周囲の人々も一般国民も共同し

てそうしなければならない。どうしても「協力の大切さ」を共有しなければならない。「大来レポート」の長期的提案²⁷⁾をもっと活かすことが必要である。そうでなければ国はさらに停滞、分断、後進を繰り返すであろう。「老朽化した国家」がさらに老朽化するであろう。

今やグローバリゼーションの時代である。グローバリゼーションは国際化とは違う。国際化は仕切りのあるサッカーボールのようであるが、グローバリゼーションはのっぺらぼうな大きなゴムまり (borderless) のようである²⁸⁾。

古き昔は確かに良かったが、懐旧に浸っては何も進まない。ボーダーレス時代には国の内部の奥深いところも異文化接触の影響を受ける。こういう世界的な傾向はますます強くなっており、そのことにアルゼンチンの為政者も一般国民ももっと目覚め、それに応じて行動しなければならない、と私は強調したい。

種々さまざまな悪循環が幾重にも重なり、アルゼンチンでは、根本的解決が遠のいている。いつになったら社会全般が改善の大軌道に乗るのであろうか。2001年の複合的危機のあとに多くの有識者たちは反省し、地方も中央も、国民も政府も、一緒になって、長期的に協力する必要性を提案してきたが、その後の経緯を見ていると、残念ながら、それらが活かされていない。全て後回しにされている。まさに冒頭の哲学者Enrique Valiente Noailles (エンリケ・バリエンテ・ノアイジェ) が経済成長と公民意識の逆相関で述べたことが見事に起きているのである。

マルデルプラタ (Mar del Plata) の近くの「バルカルセ」(Balcarce) に「ファン・マニエル・ファンヒオ自動車博物館」(Museo del Auto-

27) 阿部清司, 「アルゼンチン経済の破綻と活性化……大来レポートの再評価」『世界経済評論』Vol. 51, No. 6. 2007年6月号, を参照されたい。

28) 詳しくは, 阿部清司『大学と日本の国際化……知的国際貢献の試み』ジアース教育新社, 2004年, 第4章 (pp. 301-303) を参照されたい。

movilismo Juan Manuel Fangio) がある。ファンヒオと言えば知らないアルゼンチン人はいない。世界のF1レースで5回優勝²⁹⁾したアルゼンチン人だからである。館内を見学していて、その彼の次の言葉が目についた。

Tratar de ser el mejor, sin creer ser el mejor. Fangio

すでに最も良い状態にあると思わないで、いつもより良い状態を目指して努力すること。ファンヒオ

まさに「改善」(Kaizen)である。世界最速のF1レーサーになるためにファンヒオがいかに必死の覚悟で努力し続けたか、周囲の人々や企業がいかに常に協力したか、がよくわかる。Kaizenという日本語はすでに欧米の企業家の間では周知であるが、それと同じ意気込みがここにある。アルゼンチンのHONDAのオートバイの店の看板にはKaizenという言葉がよく大書されている。それを大学院クラスで引き合いにだしながら、私はホンダやトヨタのKaizen運動を説明することになっている。ブエノスアイレスの優秀な中小企業の中には、共通のルールを守りながら、Kaizen運動に毎日励んでいるところがある。またコルドバには技術を蓄積した優秀な中小企業が多いが、彼等もKaizen運動の受益者である。

そういう意気込みにより多くのアルゼンチン人が従うこと待望される。もし団体として公衆道徳を守りつつ「日々改善」に取り組む組織的な動きが各地で生じるなら、アルゼンチンに明るい未来が訪れるであろう。そう願うのは私一人だけではないであろう。

29) 1951, 54, 55, 56, 57年にF1レース世界チャンピオンとなったのがファンヒオである。

10 結論

アルゼンチンは自然、文化、食料、天然資源、エネルギー資源が豊かであり、優秀な人材にも恵まれている。善良な市民なら、挨拶を交わし、互いの友情にあつく、外国人にも気軽に話しかける。これらはアルゼンチンの明の部分であるが、その社会には残念ながら暗の部分が沢山存在する。アルゼンチン経済が停滞しガバナンスが悪いのは、アルゼンチン人独特の国民性とも関係がある。

アルゼンチンは1816年に独立したが、それから194年たった2010年でも国論の統一が見えない。歴史にもまれて形成された独特な国民性は協力や一致を苦手とする。国民の公民意識は低く、不正や汚職や賄賂を容認する伝統がある。改革よりも習慣を優先させ理論をかざすことで満足する貴族趣味も根強い。現地の日本企業のトップは「そういう習慣の違いがコストパフォーマンスを悪くし、取引コストを高めている」と嘆く。賄賂を出せばその分が売値に上乗せされ、コスト高となるからである。

ビジネス環境はまだ整っていない。**ガバナンス**が悪く、**制度的能力**は未発達である。市場機構がうまく働く環境にはない。全てにおいて政治が先行する。上層階級はますます富み特権を楽しむが、疎外された下層階級は**貧困の悪循環**に苦しむ。学校教育は荒廃し、先生は教える熱意を失う。効果的な公民教育はなされていないのも当然である。

他の多くの途上国と同様に、アルゼンチンは**法治国家**でも民主国家でもない。民主的な法治国家においては「行政府がその権力行使の限界を知らない」ということは「あり得ない」が、アルゼンチンではその「あり得ない」ことが日常化している。民意が正しく国政に反映されることはない。**ポピュリズム**では法律よりも**権力**がモノを言い、三権は未分立のままとなる。

昔の1925年に、アインシュタインは「このような無秩序な仕組みでは

いくら豊かな国土でも国としては発展できない」と述べたが、これは今でも真実である。**Viveza Criolla**（ビベサ・クリオージャ）というアルゼンチン独特の国民性の弊害が、特に外国にいと、明らかである。確かに個人主義や法の軽視や無責任や腐敗が行き過ぎている。警告を発する良心的な有識者は多いが、それに有力政治家が傾聴することはない。

アルゼンチン自滅の原因は、第一に**行政側の「公民意識の欠如」**にある。第二に**一般市民側の「公民意識の欠如」**にある。権力はすべて憲法に沿って行使しなければならないという意識が、政治家に、基本的に欠けている。国民には憲法にそって義務と権利を果たさなければならないという意識が欠ける。中央政府と地方政府が、さらに一般には政府と国民と一緒に働かないならば、国家として前進することはない。自滅の原因の第三は、**グローバリゼーション時代の「生き方」**に為政者も周りの人々も一般市民も目覚めていない、ことである。

以上のような諸悪の根源は**司法の腐敗**にある。最も腐敗した機関が最高裁判所であるとも言われる。腐敗した裁判制度は**国民の価値判断**を鈍らせ、公民意識を低め、汚職の蔓延や三権の未分立を容認する。何が正しいか、何が誤っているか、に関する根本的な判断が狂っているのも不思議ではない。

ねじれた国民性、市場制度の未発達、深刻な貧困問題、荒廃した教育、……すべての暗い部分は互いに絡み合い、**複合的に悪循環**している。その絡み合いを解くことは不可能に近い。

まとめると次頁（35ページ）に示すような悪循環が多種多様な面に潜んでいる。

これらの各局面が複雑にからみあい、アルゼンチン社会は全体として深刻な悪循環に陥っている。悪循環が重なり合って混迷が深まっている。特に社会の最小単位（家庭）の崩壊の影響は大きい。古代ローマが滅びたのは家庭の崩壊のためであった、事が想起される。以上の諸局面は多

アルゼンチン社会の停滞の諸局面

アルゼンチン社会の発展は停滞している	1 不正, 汚職, 賄賂 (ビジネス取引コスト最大, 信頼できない取引相手, 約束の不履行)	→ アルゼンチン社会の発展はさらに停滞する (後退、分裂、退廃)
	2 教育の荒廃 (先生は熱意を失い生徒は勉強しない, 手本となる人物がいない, 生徒は目標や学習意欲を失う)	
	3 家庭の荒廃 (分裂, 暴力, 子供の訓練の不足, 親が子供の手本とならない, 親の悪い見本, 両親の共働き)	
	4 NiNi(ニニ)世代の増加 (勉強しない働かない若者が中間層で増加, 努力しない若者は目標や自信を欠く, 将来は暗い)	
	5 Viveza Criolla (ビベサ・クリオージャ, アルゼンチン独特のずる賢しさ, 自己中心主義, 相互不信, 社会無秩序の根本的原因)	
	6 Amiguismo (アミゴ主義〈友人主義〉, 自愛主義の延長, 強い縁故主義 (nepotismo), 家族や親族や友人は法を超えて大切にすると, そういう仲間意識で各界は固まる)	
	7 個人主義の行きすぎ (優れた才能の個人は多いがその共同活用はない, 専門的な知識や技能は独り占めされる)	
	8 習慣や伝統に執着 (人々の考え方は保守的, 世界の動向に逆行, 過去の栄光に生き, 設備や制度の老朽化が進む)	
	9 民主主義の欠落 (大統領の権力が絶大, 三権は未分立, 不透明な政治, 政府による公表データの意図的操作)	
	10 Asistencialismo (アシステンシアリスマ, お金のばらまきによる人気取り政策, 大衆迎合政治Populismo (ポピュリスモ) の横行)	
	11 民衆の根強い政府不信 (その不満が不景気で爆発, デモの多発, 官民協力は不可能, 脱税が横行, 汚職は公認)	
	12 司法の腐敗 (公正な裁判の欠落, 法無視の定着, 法安定性の欠如, Vivo(ビーボ) は法無視の典型, 最高裁判所が腐敗)	
	13 長期目標の欠落 (短期志向, 一時的対策の連続, 政策に一貫性がない, 時の権力者の意向が全てを決める, 人治主義)	
	14 社会制度の後れ (市場メカニズム機能の前提となる諸制度が未発達, 政府はそれらの近代化に無関心)	
	15 介入主義 (統制価格の横行, 富は経済よりも政治によって造られると考えられ, 統制経済の矛盾が随所で明らか)	
	16 公共設備の老朽化 (社会インフラ投資の欠落, 施設の老朽化, 荒廃する駅と鉄道と空港 (レーダーなどの老朽化))	
	17 階級格差の拡大 (貴族趣味の上流階級, 食料不足の下流階級, 実効的な貧困削減はない, 北の諸州は特に貧しい)	

かれ少なかれ他の貧しい途上国にも見られるが、そうでないアルゼンチン独特のものもある。それが**Viveza Criolla**（ビベサ・クリオージャ）である。これこそ**もっとも厄介なマイナス面**であり、アルゼンチンの発展を停滞させている諸原因の根底にあるものである。アルゼンチンを停滞から救う鍵はそういう国民性の改良と変化にあり、これは国民一人一人に課せられている。一人一人の考え方（*mentalidad*）を前向きに協調的に改良する必要がある。国づくりの基本は人づくりにある。

南米のアルゼンチンの周りにはより貧しい国々が沢山ある。それらに比べればアルゼンチンはまだ良いほうである、というのは事実である。アルゼンチンのマクロ経済成長率は高く、世界的にも注目されている。法的不安定性はあるがアルゼンチンに投資すれば儲かると思われ、先進国の投資家はなおこの国に注目している。底力はかくも大きい、悪循環の弊害も大きい。秘められたその「底力」が開花する日が来るのだろうか。

法的安定性を回復する要となるのは、**憲法の尊重、遵守、施行**である。厳しいがそういう**公民意識の向上**の経路を避けて通ることはできない。政治家もその周囲の人々も一般国民も互いに**順法精神**に目覚め行動しなければならない。そうやって、もし**相互信頼**が回復され、一貫した長期計画の実行が軌道に乗るならば、アルゼンチン社会の将来に希望が見えてくるであろう。もし、政治家も企業家も一般市民も共に反省し、憲法に従って公民としての義務を互いに果たすならば、国の秩序は回復に向かうであろう。これは条件付楽観、大きな厳しい条件つきの慎重な楽観、である。この条件が達成される見込みは現実にはどうであろうか。……複雑にからみあった悪循環を見ていると、残念ながら、その見込みは低い。どうしても悲観論が漂ってしまうのである。

参考文献

- Agustina Lanusse, “Vivimos divididos, sin confianza en el otro y disgregados. El filósofo José Luis Glimidi analiza el daño civil que cause el individualismo.”, La Nacion, 4 de agosto de 2007
- “Argentina, país… ¿ honesto ? , El Día, Revista, 19 de agosto de 2007
- Carmen María Ramos, “Cuando los argentinos piensan una coas, ya creen que está hecha”, La Nación, Miércoles 31 de enero de 2007
- Crece el consume de drogas entre los estudiantes bonaerenses, La Nacion, 7 de octubre de 2007
- Crisis Argentina 2001 (JICA DVD)
- Daniel Montamt, “Estamos entrampados en el corto plazo”, La Nación, Sábado 21 de julio de 2007
- Enrique Valiente Noailles, “En el país crece la economía, pero falta conciencia cívica”, La Nacion, Lunes 16 de octubre de 2006
- Fernando Fregueiro, “Estamos narcotizados con el crecimiento”, La Nacion, Domingo 19 de Agosto de 2007
- FelixV. Lonigro, “La importancia de la Constitución”, LA GACETA DE ECONÓMICAS, Año 4 Nº31
- “Hay 500.000 pobres más de lo que dice el Indec”, La Nación, lunes 13 de agosto de 2007
- José Luis Galimidi, “Vivimos divididos, sin confianza en el otro y digregados” El filósofo José Luis Galimidi analiza el daño civil que causa el individualismo “, La Nacion, Sábado 4 de agosto de 2007
- Julio Crespo Argañaras, ¿ Qué país quieren los La “Viveza Criolla” en Argentina es la causa principal de una crisis moral, cultural, económica, social y política argentinos ?, <http://www.tabaquisimo.freehosting.net/>, Agosto 2006
- Monthly JICA, July 2007
- Natalio Botana, El juego de la corrupción, La Nación, 16 de agosto de 2007
- La Nación, Sábado 28 de julio de 2007.
- Natalio R. Botana, “El juego de la corrupción”, La Nacion, Jueves 16 de agosto de 2007
- Ruth Sautu, TODO es TEORÍA, Lumiere, 2003
- 阿部清司「アルゼンチン経済の破綻と活性化……大来レポートの再評価」『世界経済評論』, Vol. 51, No 6 . 2007年6月号。

- 阿部清司『大学と日本の国際化……知的国際貢献の試み』ジアース教育新社，2004年。
- 阿部清司「アフリカ経済の悲観……Afro-Pessimism……」『千葉大学経済研究』，第16号第4号，2002年3月。
- 阿部清司「南北問題とグローバリゼーション」『千葉大学経済研究』，第15巻第2号，2000年9月。
- 阿部清司『タイ経済病と自助努力』千葉大学経済研究叢書3，1999年。
- 阿部清司「インドネシア経済の発展と停滞」『千葉大学経済研究』，第14号第3号，1999年12月。
- アルベルト松本『アルゼンチンを知るための54章』明石書店，2005年9月。
- 稲葉公彦「経済随筆 法的安定性の欠如をものとしなないアルゼンチン」在亜日本商工会議所会報，第39号（2007年1月号）。
- 今井圭子「壁にぶつかった“アルゼンチン・モデル」『月刊 オルタ Alternatives』，2001年11月号。
- 井垣 昌「失業・インフレ・家計逼迫……暮らしから見える経済危機」『月刊 オルタ Alternatives』，2001年11月号。
- 杉本昭七・関下 稔・藤原貞雄・松村文武『現代世界経済をとらえる』，東洋経済新報社，1996年。
- 西田幸次「所得格差と貧困問題」亜国政経概況（第21回日亜経済合同委員会資料，2006年9月）。
- 原田 泰・黒田岳士「なぜアルゼンチンは停滞し，チリは再生したか」，内閣府経済社会総合研究所（ESRI Discussion Paper No. 46）。
- 私のホームページ「アルゼンチンの厳しい現実」（<http://kiyoshiabe.world.coocan.jp/REA.htm>）
- 山崎圭一「アルゼンチン危機とブラジル，ペルー」インターネット公開論文（<http://www.biz-point.com.br/jp/reports/yamaz/0203.htm>）

（2010年1月4日 受理）

Summary

Vicious Circle in Argentina

——Viveza Criolla and National Disunity——

Kiyoshi ABE

Argentina is blessed with natural and human resources, but is beset with so many indigenous problems, being divided politically and stagnant economically. Why? Mainly because of the distinct nationality called Viveza Criolla.

Almost 200 years have passed since its independence in 1816, but there is still no real national unity in Argentina. People dislike cooperation. Their civic consciousness is low. Corruption is still rampant. Schools are falling apart due to the low moral level. No civic education is effectively offered at school.

The nation is never under the rule of law. Politics precedes, and interferes with, all others. There is no real division of the three powers according to the National Constitution. The result is infamous corruption of justice.

Back in 1925 said Albert Einstein, “no nation could develop, with such widespread disorders in the society, even if blessed with abundant resources.” His remarks still remain valid today. All the disorders of Argentina are fundamentally due to the Viveza Criolla, the sly and underhanded practice nurtured traditionally inside the country.

The roots of the Argentine decline reflect the lack of the civic consciousness both of the government and of the people, and the lack of

national goal or vision on how to survive in the age of globalization, all being related more or less to the *Viveza Criolla*. The enormous disorders of the society are typified by the corruption of tribunals (especially that of the Supreme Court). The corrupt judicial system paralyzes the morality of the people, which reflects the tragic distrust of the government by the people. No wonder, Argentina fails to develop fully into a modern democratic country.